

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
医療倫理学	平塚 健太 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	臨床で求められる医の倫理感を身に着ける基礎となる講義を行う			
到達目標	臨床における倫理観, マナー, 常識を知り, 理解できるようになる			
授業計画				
1	倫理とは	オリエンテーション・倫理の概要を理解する		
2	医療における倫理	医療倫理の4原則について理解し、考えを述べることができる		
3	医療者と患者の関係①	医療面接の基本的な考えを理解し、考えを述べることができる		
4	医療者と患者の関係②	医療面接の手法を理解し、考えを述べることができる		
5	コメディカルの職業倫理①	理学療法士・作業療法士の職業倫理を理解する		
6	コメディカルの職業倫理②	理学療法士・作業療法士の職業倫理を理解し、考えを述べることができる		
7	生命誕生のあらし①	出生前診断, 胚選別, 妊娠中絶について理解する		
8	生命誕生のあらし②	出生前診断, 胚選別, 妊娠中絶について理解し、考えを述べることができる		
9	薬害と医療事故	薬害の歴史や医療事故について理解し、考えを述べることができる		
10	人工臓器	ES 幹細胞移植 iPS細胞の治療や倫理的問題を理解する		
11	臨床研究の倫理①	臨床研究における倫理の歴史を基に考えを述べることができる		
12	臨床研究の倫理②	臨床研究における倫理の歴史を基に考えを述べることができる		
13	障害の受容	障害を受け入れる過程について理解する		
14	終末期医療, 安楽死と 尊厳死	終末医療と尊厳死について理解を深め, 自分の考えを述べることができる		
15	まとめ	症例課題に基づき自分の考えをまとめ, 述べることができる		
教科書	必要に応じて提示する	履修条件	15回の講義なので4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	教養としての生命倫理	留意事項等	できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで, 適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
医療情報科学演習Ⅰ		外館 洸平 (実務経験教員)		1	1	前期
授業概要		パソコン操作を不便なく行うことができ、ICT化する臨床現場に対応できるように推奨する情報収集のあり方などを、講義・演習を通して習得できる				
到達目標		パソコンの基本的な使用方法と情報リテラシーを身に付け、自身で取りまとめた情報を対外的に公開することができるようになる				
授業計画						
1	オリエンテーション	パソコンの基本的な操作を習得することができる				
2	Gmail、Google Classroom	メールでの連絡方法、およびGoogle Classroomを使用した課題の提出方法を習得することができる				
3	OneNote	OneNoteを使用して授業のノートをとることができる				
4	Word	文章を入力などの基本的な操作、レイアウト変更や図表の挿入ができ、見やすい文章を作成することができる				
5	PowerPoint	基本的な操作を理解し、プレゼンテーション用の資料を作成することができる				
6	Excel	基本的な操作を理解し、グラフ作成、関数を使用した計算を行うことができる				
7	情報リテラシー①	自他の個人情報の重要性を知り、個人情報を守るために正しく対処できる				
8	情報リテラシー②	文献検索の意義を理解し、文献検索を行うことができる。また、著作物に関する権利を理解し、正しく用いることができる。				
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
教科書		資料配布		履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書		必要に応じて提示する		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価		各回で課題の提出を求め、提出物が指定された条件を満たしているか採点する				
備考		基本操作の紹介は行うが、操作の習熟は各自の自己練習に期待したい				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
解剖学	成田 大一 (実務経験教員)		2	1	前期
授業概要	全ての医学的知識の基盤となる人体の構造ならびにその機能について運動器，循環器などの器官系に分けて系統的に学習する。また学習の理解度を深めるためにグループでの討議を取り入れる。小テストをこまめに実施して理解度を確認する。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。				
到達目標	1. 医療分野における解剖学的重要性を説明できる 2. 解剖学用語を理解し，適切に用いることができる 3. 運動器の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 4. 骨格模型を用いて，各骨の名称ならびにそれらの連結について説明できる 5. 循環器系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 6. 他学生とのグループ討議を通して理解を深めることができる				
授業計画					
1	オリエンテーション	・医療分野における解剖学的重要性を理解し，説明できる ・身体の部位や方向に関する解剖学用語を理解し，説明できる			
2	運動器系概論： 骨格系・筋系	・各面における運動について説明できる ・骨格を構成する骨と軟骨について，その構造や役割を説明できる ・各骨同士の連結について説明できる ・骨格筋の構造と関節の構成要素について説明できる			
3					
4					
5					
6	運動器系概論：神経系	・末梢神経について，その種類や特徴，役割を説明できる			
7	運動器系各論：体幹	・体幹の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴，連結について説明できる ・体幹の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経，作用について説明できる			
8					
9					
10	運動器系各論：上肢	・上肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴，連結について説明できる ・上肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経，作用について説明できる			
11					
12					
13	体幹・上肢の骨格系の復習 (骨格模型を用いたグループワーク)	・体幹・上肢の骨格構造について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる ・体幹・上肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の名称や形状，特徴，連結について骨格模型を用いて説明できる			
14					
15	運動器系各論：上肢	・上肢の運動に関連する筋の起始・停止や支配神経，作用について説明できる			
16					
17	運動器系概論・各論 (体幹・上肢) 復習	・これまで学習してきた運動器系の概論・各論(体幹・上肢)について理解を深め，これらの構造や機能をより詳しく説明できる			

18	運動器系各論：下肢	・ 下肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の形状や特徴， 連結について説明できる ・ 下肢の運動に関連する筋の起始・ 停止や支配神経， 作用について説明できる		
19				
20				
21	下肢の骨格系の復習 （骨格模型を用いたグループ）	・ 下肢の骨格構造について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる ・ 下肢の骨格構造についてその全体像ならびに各骨の名称や形状， 特徴， 連結につ		
22	運動器系各論：下肢	・ 下肢の運動に関連する筋の起始・ 停止や支配神経， 作用について説明できる		
23				
24	運動器系各論：頭頸部	・ 頭頸部の構造ならびに頭蓋の形状や連結， 各孔の名称およびそこを通る構造物， 特徴について説明できる ・ 表情筋や咀嚼筋， 外眼筋など脳神経に支配される筋について説明できる ・ 目や耳といった特殊感覚器の構造について説明できる		
25				
26				
27	頭頸部の骨格系の復習 （骨格模型を用いたグループ）	・ 頭蓋について骨格模型を用いながらグループ内で討議できる ・ 頭蓋の形状や連結， 各孔の名称ならびにそこを通る構造物， 特徴について骨格模		
28	循環器系	・ 動脈と静脈の特徴ならびに大動脈とそこから分岐する枝について説明できる ・ 心臓の構造と機能ならびに刺激伝導系， 心臓に分布する動脈・ 静脈について説明できる ・ リンパ管系について説明できる		
29				
30				
教科書		・ 塩田浩平， 他監：グレイ解剖学 原著第4版	履修条件	30回の講義の内， 7回以上欠席の場合は定期試験を受験できない
参考書		・ 加藤征， 監：Qシリーズ 新解剖学 フルカラー新装版 ・ 坂井建夫， 他編：カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版 ・ 相磯貞和， 他：ネッター解剖学アトラス 原著第6版 ・ 松村譲児：イラスト解剖学 第 9 版	留意事項等	できるだけ欠席せず， 予習復習を怠らないこと
成績評価		・ 小テスト， 中間試験・ 期末試験， グループワークの内容をもって総合的に評価します ・ 総計の60%以上を合格とします。		
備考		・ 授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくること ・ 分からない点を質問するなど教員をうまく活用し， 知識の定着に努めること		

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
解剖学演習	成田 大一 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	神経系，消化器系，呼吸器系，泌尿生殖器系，内分泌系について系統的に学習する。また学習の理解度を深めるためにグループでの討議など振り返りの時間を取り入れる。小テストをこまめに実施して理解度を確認する。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。			
到達目標	1. 解剖学用語を理解し，適切に用いることができる 2. 神経系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 3. 消化器系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 4. 呼吸器系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 5. 泌尿生殖器系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる 6. 内分泌系の構造を理解し，各部位の名称や役割・特徴について説明できる			
授業計画				
1	大脳（終脳）	大脳の形態と機能局在について説明できる		
2	大脳の内部構造と白質	大脳の内部に存在する神経核（大脳基底核など）と白質を構成する神経線維について説明できる		
3	間脳・脳幹	間脳（視床，視床下部，視床上部）ならびに脳幹（中脳－橋－延髄）の構造と機能について説明できる		
4	小脳・脊髄	小脳，脊髄の構造と機能について説明できる		
5	伝導路	錐体路や錐体外路などの下行路と脊髄視床路などの上行路について説明できる		
6	髄膜と脳脊髄液，脳室系 脳の血管	内頸動脈系と椎骨動脈系，動脈輪，脳室と脳脊髄液の循環経路について説明できる		
7	脳神経の種類と特徴	脳神経とは何か，その構造と機能について説明できる		
8	自律神経系	自律神経系の構造と機能について説明できる		
9	消化器系	・ 口腔から肛門に至る消化管の構造と機能を説明できる。		
10		・ 消化に必要な酵素を産生・貯蔵する付属器官についてその構造と機能を説明できる		
11	呼吸器系	・ 消化管に分布する動脈・静脈について説明できる		
12		鼻腔から肺に至る呼吸器の構造と機能を説明できる		
13	泌尿・生殖器系	腎臓や膀胱，尿道などの泌尿器と精巣や卵巣，子宮などの生殖器について男女の違いも含めてその構造と機能を説明できる		
14				
15	内分泌系	内分泌系の構造と機能について説明できる		

教科書	・塩田浩平，他監：グレイ解剖学 原著第4版	履修条件	15回の講義の内，4回以上欠席の場合は定期試験を受験できない
参考書	・坂井建夫，他編：カラー図解 人体の正常構造と機能 全10巻縮刷版 ・加藤征，他編：新解剖学 フルカラー新装版 第7版（Qシリーズ） ・相磯貞和，他：ネッター解剖学アトラス 原著第6版 ・松村譲児：イラスト解剖学 第9版	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	・小テスト，期末試験の内容をもって総合的に評価する ・総計の60%以上を合格とする		
備考	・授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくる ・分からない点を質問するなど教員をうまく活用し，知識の定着に努めること		

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
生理学		石田 裕二 (実務経験教員)		2	1	前期
授業概要		生体機能の基礎的知識（生命活動の本質），呼吸，循環，消化，排泄，それらを調節する自律神経や内分泌系の働きを学習する 特に各種の障害に深く関係する神経生理学を重視した内容を展開する				
到達目標		生体機能についてそのメカニズムの理解を深め，専門分野の学習が円滑に行うための基礎医学的知識を習得し，医学的視点からフィジカルアセスメントにつながる基礎的な知識を深めることができる				
授業計画						
1	概説	生命現象とは何か，人体の構造とその概略についてイメージできるようになる				
2	細胞 ①	生命の原点である細胞の構造と機能についてその概略が理解できる				
3	細胞 ②	分極，脱分極，再分極など細胞膜と生命現象の関係の概略を理解できる				
4	神経系①	ニューロン（neuron）、シナプス（synapse）など、神経の基本構造を理解できる				
5	神経系②	中枢神経系（脳と脊髄）の構造と機能の概略を理解できる				
6	神経系③	中枢神経系と末梢神経系の形態的・機能的な分類ができるようになる				
7	筋生理	筋収縮に関するエネルギー供給・代謝について説明できる 滑走説を説明できる				
8	脊髄反射①	脊髄の構造と機能の概略を説明できる 筋紡錘の構造と機能を説明できる				
9	脊髄反射②	脊髄反射の回路が理解できる 錘内筋の活動、機能について理解できる				
10	脊髄内の伝導路	上行路と下行路の詳細を学習し、その機能を理解できる				
11	上位運動ニューロンと下位運動ニューロン	脊髄反射の回路の概略を把握し、上位・下位運動ニューロンとの関係性が理解できる				
12	神経障害概論①	錐体路障害と錐体外路障害について理解できる				
13	神経障害概論②	運動麻痺と感覚障害の発生機序について、神経系の構造と機能から理解できる				
14	自律神経概論	植物機能の神経性制御について概略を理解できる				
15	内臓学概論	循環器と呼吸器の構造と機能の概略を理解できる				
16	血液・体液	ホメオスタシスに關与する血液・体液について、その機能の概略を理解できる				
17	呼吸・循環器各論①	呼吸器・循環器の構造と機能が理解できる				
18	呼吸・循環器各論②	心疾患と肺疾患、それにまつわる酸塩基平衡障害についての概略が理解できる				

19	呼吸・循環器各論③	心電図の概略が理解できるようになる		
20	呼吸・循環器各論④	呼吸器と循環器の機能の関連性と心電図の変化の概略が理解できる		
21	心電図学①	心電図のメカニズム、診断的価値について理解を深めさせる		
22	心電図学②	心電図の波形の意味について考えを深め、代表的な異常心電図についてその発生機序を考察できる		
23	内分泌学①	ホルモンやサイトカインについて論じ、その作用について理解を深めさせる		
24	内分泌学②	内分泌に関わる臓器、生産過程などを理解できる		
25	自律神経系各論	ホルモンと共に神経性制御についてりかいはできる		
26	泌尿器学①	腎臓と膀胱の機能と構造について理解できる		
27	泌尿器学②	膀胱の神経支配、排尿反射と神経因性膀胱の概略を理解できる		
28	消化器学①	消化器の構造と機能について概略が理解できる		
29	消化器学②	消化酵素（科学的消化）の作用について理解できる		
30	酸塩基平衡	呼吸・代謝機能の全貌から酸塩基平衡について理解できる		
教科書		Qシリーズ 新生理学	履修条件	電子教科書にて授業を進行する PCを用意すること30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		ギャノン生理学	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価		・ 30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
生理学演習	石田 裕二 (実務経験教員)		1	1	後期
授業概要	生理学演習では生理学で学んだ知識を具体的に演習を通じて体験し、臨床に必要な不可欠な知識の理解を深める				
到達目標	臨床現場に必要な基礎的な知識と技術（バイタルサインの計測など）を習得し、専門領域につながる技能を習得する				
授業計画					
1	循環器系の計測	循環動態と血圧の関係を理解し医学的根拠を持って血圧を計測することができる			
2	心電図 ①	心電図の基礎的なメカニズムを理解することができる			
3	心電図 ②	標準12誘導と胸部単極誘導について臨床的意味を説明できるようになる			
4	心電図 ③	異常心電図と正常心電図を比較し、病的問題点を評価できるようになる			
5	心電図 ④	標準12誘導を具体的に計測し、その臨床的技術を習得する			
6	呼吸器系 ①	呼吸器疾患の臨床像とスパイログラムの関係を理解できる			
7	呼吸器系 ②	スパイログラムを用いた肺機能の計測を体験し理解を深める			
8	呼吸循環 ①	有酸素運動と無酸素運動、ATポイントなどの意味を理解する			
9	呼吸循環 ②	運動負荷試験を体験し臨床的意義や基礎的知識を習得する			
10	筋電図 ①	筋電図の波形についてその意味を理解できる			
11	筋電図 ②	筋電図データの解析についてその意味と手法を理解できる			
12	筋電図 ③	表面筋電計を用いて具体的に計測し波形と骨格筋・神経制御の実態を把握できる			
13	筋電図 ④	誘発筋電計を用いてF波やH波の計測し、脊髄の興奮性について理解を深める			
14	筋電図 ⑤	誘発筋電計を用いて末梢神経伝導速度を計測し、臨床的意義を理解する			
15	感覚検査	表在・深部感覚の具体的な計測から、神経障害の症状についての理解を深める			
教科書	Qシリーズ 新生理学		履修条件	電子教科書にて授業を進行する PCを用意すること15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	ギャノン生理学		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
人間発達学		千葉 馨 (実務経験教員)		1	1	前期
授業概要	人が成長する過程について中枢神経系の発達を中心に社会的に活躍し老年期に至るまでを理解し、その各ステージでの理学療法士・作業療法士の関わる視点を理解できる					
到達目標	新生児期からの発達過程に関わる神経系の理解と身体活動について理解できる					
授業計画						
1	正常発達について	発達の原則、ヒトの正常発達について				
2	発達の概念	胎芽と胎児の発達過程に始まり、人間発達期について				
3	姿勢反射、反応とは	発達過程における反射・反応について学び、正常な発達の獲得の背景である中枢神経の成熟、筋と骨格の成長について理解できる				
4	脊髄レベルの反射	正常児の脊髄レベルの反射について出現時期、消失時期、どのような反射かを理解できる				
5	脳幹レベル反射	正常児の脳幹レベルの反射について出現時期、消失時期、どのような反射かを理解できる				
6	中脳レベルの反射①	正常児の中脳レベルの反射について出現時期、消失時期、どのような反射かを理解できる				
7	中間試験 大脳レベルの反射①	講義の1～7回目の内容について中間テスト（30分程度）を行う				
8	大脳レベルの反射②	正常時の大脳レベルの反射について出現時期、消失時期、どのような反射かを理解できる				
9	運動の発達①	1～3歳までに見られる姿勢反射および反応獲得について理解できる				
10	運動の発達②	6歳までに見られる姿勢反射および反応獲得について理解できる				
11	上肢機能の発達	ヒトの上肢機能を学び、成長過程で獲得できる運動等について理解できる				
12	感覚・知覚・認知・社会性の発達	環境の刺激情報処理である感覚、知覚、認知について学び、感覚システムの発達について理解できる				
13	ADLの発達（遊び・食事・排泄・更衣）	中枢神経系の発達と日常生活活動動作（ADL）の獲得の関係性を理解できる				
14	発達検査	遠城寺式乳幼児分析的発達検査、日本版デンバー式発達スクリーニング検査、日本版ミラー幼児発達				
15	学童・青年・成人・老年期の発達	エリクソン「8つの発達段階」について理解できる				
教科書	上杉雅之監修 イラストでわかる人間発達学 医師薬出版株式会社			履修条件	前講義の1/5を欠席すると単位を取得できない	
参考書	講義資料中に示す			留意事項等	適宜小テストを不定期に行うので授業で行った部分の理解・知識の補完を常に行うこと	
成績評価	中間および期末試験、授業態度、提出物について成績の対象とする。 60点以上「C評定」より単位修得となる					
備考	授業終了後の理解度アンケート、不定期な小テスト等を実施する。積極的な質問を歓迎する。					

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
運動学	羽澤 晃士 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	運動学は身体運動の仕組みに関する学問であり、その理論的基盤をなす専門基礎科目である。本科目では、正常な身体運動を理解するうえで必要な運動器の基本構造と機能を学ぶ。さらに、身体各部位の関節構造と機能を関節運動と関連づけて学習し、機能解剖学的視点から四肢、脊柱・体幹、頭部における各関節運動の仕組みを深める。			
到達目標	リハビリテーションの対象となる運動障害のメカニズムを理解するために、身体運動を遂行するうえで必要な運動器（筋骨格系・神経系）の基本構造と機能を学び、四肢、脊柱・体幹、頭部における各関節運動の仕組みについて説明できるようになる。			
授業計画				
1	オリエンテーション	本授業の概要ならびに運動学の学問領域について理解できる		
2	骨の構造と機能	骨格を形成する骨の名称、骨の基本構造と機能について理解できる		
3	関節の構造と機能①	関節の基本構造、関節の分類について理解できる		
4	関節の構造と機能②	関節運動の表し方、関節包内における関節運動について理解できる		
5	関節の構造と機能③	主要な関節とその運動方向について理解できる		
6	骨格筋の構造と機能①	骨格筋の構造について理解できる		
7	骨格筋の構造と機能②	筋の収縮機序、活動電位について理解できる		
8	骨格筋の構造と機能③	筋線維の種類、運動単位、神経支配比について理解できる		
9	骨格筋の構造と機能④	筋の収縮様式、筋のはたらき、筋肥大と筋萎縮について理解できる		
10	骨格筋の構造と機能⑤	筋の静止張力と活動張力について理解できる		
11	生体力学①	関節モーメント、外力と内力について理解できる		
12	生体力学②	身体とてこ、筋力と重力について理解できる		
13	体位と重心①	体位と構え、基本肢位、重心が規定される要素について理解できる		
14	体位と重心②	基本的立位姿勢の理想的アライメントについて理解できる		
15	肩複合体の運動学①	肩複合体の構造について理解できる		

16	肩複合体の運動学②	肩複合体の関節運動について理解できる	
17	肩複合体の運動学③	肩複合体の関節運動における靱帯の作用について理解できる	
18	肩複合体の運動学④	肩複合体の関節運動における筋の作用について理解できる	
19	肘関節・前腕の運動学①	肘関節・前腕の構造，関節運動について理解できる	
20	肘関節・前腕の運動学②	肘関節・前腕の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
21	手関節の運動学①	手関節の構造，関節運動について理解できる	
22	手関節の運動学②	手関節の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
23	手指の運動学①	手指関節の構造，関節運動について理解できる	
24	手指の運動学②	手指関節の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
25	股関節の運動学①	股関節の構造，関節運動について理解できる	
26	股関節の運動学②	股関節の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
27	膝関節の運動学①	膝関節の構造，関節運動について理解できる	
28	膝関節の運動学②	膝関節の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
29	足関節の運動学①	足関節の構造，関節運動について理解できる	
30	足関節の運動学②	足関節の関節運動における靱帯および筋の作用について理解できる	
教科書	・基礎運動学	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると期末試験を受験できない
参考書	・15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価	・30回の講義のなかで，適宜小テストを実施する ・小テスト，期末試験の結果を総合して成績に反映させる		
備考			

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
運動学演習	羽澤 晃士 (実務経験教員)		1	1	後期
授業概要	前期に引き続き、正常な身体運動を理解するうえで必要な運動器の基本構造と機能を学び、身体運動・動作の仕組みについて理解を深める。また、正常歩行に関する基本的な知識を身につけるとともに、各関節運動時に作用する筋が即座にイメージできるよう演習課題を実施する。				
到達目標	脊柱・体幹、顔面・頭部における各関節運動の仕組みについて説明できるようになる。また、歩行の動作分析に必要な基本的な知識について理解するとともに、各関節運動時に作用する筋を挙げることができるようになる。				
授業計画					
1	脊柱・体幹の運動学①	脊柱全体の基本構造と機能について理解できる			
2	脊柱・体幹の運動学②	頸椎の構造，頸部の運動と関与する筋の作用について理解できる			
3	脊柱・体幹の運動学③	胸郭の構造，胸部の運動と関与する筋の作用について理解できる			
4	脊柱・体幹の運動学④	腰椎の構造，腰部の運動と関与する筋の作用について理解できる			
5	顔面と頭部の運動学	顎関節の構造と関節運動，咀嚼筋と顔面筋（表情筋）の作用について理解できる			
6	正常歩行①	正常歩行の基本概念（歩行周期）について理解できる			
7	正常歩行②	正常歩行時の重心移動や各関節運動について理解できる			
8	正常歩行③	正常歩行時の筋活動について理解できる			
9	正常歩行④	正常歩行時の床反力について理解できる			
10	上肢の筋作用①	上肢の関節運動時における筋作用を挙げることができる			
11	上肢の筋作用②				
12	上肢の筋作用③				
13	下肢の筋作用①	下肢の関節運動時における筋作用を挙げることができる			
14	下肢の筋作用②				
15	下肢の筋作用③				
教科書	・基礎運動学		履修条件	15回の講義なので，4回以上欠席すると期末試験を受験できない	
参考書	・15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学		留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで，適宜小テスト，課題作成を実施する ・小テスト，期末試験，提出物の結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
臨床運動学演習	千葉 馨 (実務経験教員)		1	2	前期
授業概要	講義の前半は解剖学の基礎から身体の運動について学ぶ。後半では前半の基礎的知識を動作分析や活動分析の視点を得るためのアクティブラーニングを実施する				
到達目標	解剖学的知識を補完し、健常者の基本動作パターンを理解できる				
授業計画					
1	オリエンテーション	本科目の概要や学習目標について理解する			
2	骨格筋と運動①	上肢の筋と運動について／肩甲帯			
3	骨格筋と運動②	上肢の筋と運動について／肩関節の筋			
4	骨格筋と運動③	上肢の筋と運動について／肘と前腕			
5	骨格筋と運動④	上肢の筋と運動について／手指			
6	骨格筋と運動⑤	頭頸部と体幹背部①			
7	骨格筋と運動⑥	体幹前部②			
8	中間試験 骨格筋と運動⑦	中間試験30点:⑥までのテスト／下肢の筋と運動 股関節			
9	骨格筋と運動⑧	下肢の筋と運動 膝関節①			
10	骨格筋と運動⑨	下肢の筋と運動 膝関節②			
11	骨格筋と運動⑩	下肢の筋と運動 足関節②			
12	筋と起居動作①	歩行について①			
13	筋と起居動作②	歩行について②			
14	筋と起居動作③	起居動作と筋①			
15	筋と起居動作④	起居動作と筋②			
教科書	基礎運動学 第6版 中村隆一ら医歯薬出版		履修条件	15回の講義なので、4回欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	グレイ解剖学・徒手筋力検査法第10版		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・出席日数、グループワーク取り組み状況、授業態度、中間及び期末試験成績を判定、60点以上をもって合格とする。				
備考	グループワークを実施するため、グループ全員が役割をもって主体的に講義に参加すること				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
機能解剖学演習	成田 大一 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	解剖学・運動学の知識を統合し、身体運動を検査・治療方法等と関連付けられるように講義演習を行う。 本授業では担当教員の臨床における理学療法士としての実務経験ならびにこれまでの肉眼解剖教育の経験を活かして講義を展開する。			
到達目標	・外皮系について説明できる ・肩甲帯・肩関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・肘関節・前腕の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・手関節・指の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・骨盤・股関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・膝関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・足関節の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・足部の構造を理解し、運動ならびに形態学的特徴を説明できる ・末梢神経系の分布先を説明できる			
授業計画				
1	外皮系の構造と機能	外皮の構造と機能を理解するとともに、分布する感覚受容器について説明できる。		
2	骨格系の構造	各骨の名称や関節について説明できる。		
3	肩甲帯・肩関節の構造と運動	肩関節を構成する骨格・靱帯を見直し、肩甲帯ならびに肩関節の構造・運動・特徴を説明できる。		
4	肘関節・手関節・手指の構造と運動	肘関節・手関節・手指を構成する骨格・靱帯を見直し、これらの構造・運動・特徴を説明できる。		
5	骨盤・股関節の構造と運動	骨盤・股関節を構成する骨格・靱帯を見直し、これらの構造・運動・特徴を説明できる。		
6	膝関節・足関節の構造と運動	膝関節・足関節を構成する骨格・靱帯を見直し、これらの構造・運動・特徴を説明できる。		
7	足部の構造と運動	足部を構成する骨格・靱帯を見直し、これらの構造・運動・特徴を説明できる。		
8	骨格構造総復習	骨格構造について各骨の名称や形状、特徴、連結について骨格模型を用いて説明できる		
9	肩甲帯・肩関節の運動に関与する筋と運動	肩甲帯・肩関節に作用する筋を見直し、これらの運動を説明できる。		
10	肘関節・手関節・手指の運動に関与する筋と運動	肘関節・手関節・手指に作用する筋を見直し、これらの運動を説明できる。		
11	骨盤・股関節の運動に関与する筋と運動	骨盤・股関節に作用する筋を見直し、これらの運動を説明できる。		
12	膝関節・足関節の運動に関与する筋と運動	膝関節・足関節に作用する筋を見直し、これらの運動を説明できる。		
13	足部の運動に関与する筋と運動	足部に作用する筋を見直し、これらの運動を説明できる。		
14	末梢神経系の構造と支配領域	運動の情報を伝える末梢神経系の構造、特に神経叢について理解し、その分布について説明できる		
15	筋総復習	各筋の起始・停止・作用を説明できる		
教科書	授業は配布資料に基づいて実施する	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	・塩田浩平，他監：グレイ解剖学 原著第4版 ・Paul D. Andrew，他監訳：筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版 ・中村隆一，他：基礎運動学 第6版補訂	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・中間テスト，期末試験の内容をもって総合的に評価する ・総計の60%以上を合格とする			
備考	・授業資料を配布するので忘れずに授業に持ってくる ・分からない点を質問するなど教員をうまく活用し、知識の定着に努める			

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
神経障害学Ⅰ	佐藤 速太 (実務経験教員)		1	2	前期
授業概要	神経障害はOT・PTの治療対象の中核をなすものであり、臨床神経学の知識は直接治療技術に反映する 本科目は神経解剖から症候学まで必要不可欠かつ基本的な内容を網羅する				
到達目標	神経系の構造と機能を熟知し、様々な症候を医学的に理解できるようになる				
授業計画					
1	神経解剖 ①	中枢神経系（脳・脊髄）の解剖，機能局在が理解できる			
2	神経解剖 ②	中枢神経と末梢神経の構造と機能が理解できる（脳神経を中心に）			
3	神経解剖 ③	上行路と下行路，各種伝導路の構造と機能を理解できる			
4	神経解剖 ④	錐体外路，小脳の伝導路の名称，構造と機能を理解できる			
5	神経症候学 ①	上位ニューロン障害と下位ニューロン障害の特徴を説明できる			
6	神経症候学 ②	錐体路障害による脊髄解放現象により起こる症状を理解できる			
7	神経症候学 ③	錐体外路症状について理解できる			
8	神経症候学 ④	高次脳機能障害について理解できる			
9	神経症候学 ⑤	認知症の分類，症状，周辺症状（BPSD）などを説明できるようになる			
10	神経症候学 ⑥	小脳症状，球麻痺症状などの症状について理解できる			
11	神経症候学 ⑦	脊髄損傷の様々な症状・障害について理解できる			
12	神経症候学 ⑧	ミオパチーとニューロパチー，筋委縮の病態や分類について理解できる			
13	神経症候学 ⑨	内科疾患で惹起される神経・筋症状についてそのメカニズムを理解できる			
14	画像診断学	様々な神経症状と画像の関係性について理解できる			
15	まとめ	仮想症例に関してさまざまなアセスメントを展開できるようになる			
教科書	病気がみえる vol.7 脳・神経 メディックメディア社		履修条件	15回の講義なので，4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	神経診察クローズアップ正しい病巣診断のコツ メディカルビュー社		留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
神経障害学Ⅱ	平塚 健太 (実務経験教員)		1	2	前期
授業概要	神経障害学Ⅰの内容を踏まえ、本科目は具体的な神経疾患とその症状・治療について論じる				
到達目標	リハビリテーションに必要な神経疾患の理解を深め、専門領域で治療学に応用できる知識を習得し治療に応用できるようになる				
授業計画					
1	脳血管疾患 ①	多種の脳血管疾患の疫学と診断について理解できる			
2	脳血管疾患 ②	脳血管疾患に起因する症状や治療法について理解できる			
3	脳卒中 ①	脳卒中の危険因子・脳卒中の分類及び特徴について理解できる			
4	脳卒中 ②	脳卒中の分類別における症状や治療について理解できる			
5	脳卒中 ③	脳卒中の急性期における治療や特徴について理解できる			
6	脳卒中 ④	脳卒中の急性期におけるリスク管理について理解できる			
7	脳卒中 ⑤	脳卒中の回復期及び維持期における治療や特徴について理解できる			
8	認知症/高次脳機能障害①	認知症・失語症・失認・失行等の高次脳機能障害の特徴について理解できる			
9	認知症/高次脳機能障害②	認知症・高次脳機能障害の治療・姿勢定位障害について理解できる			
10	パーキンソン病	高齢者によくみられるパーキンソン病の症状や治療法を説明できる			
11	神経筋疾患 ①	筋ジストロフィーやALSの特徴について理解できる			
12	神経筋疾患 ②	各種の変性疾患(SCD・MS・PSP等)について理解できる			
13	脊髄損傷	脊髄損傷の症状，高位診断，神経学的評価法などを説明できる			
14	医用画像 ①	実際の症例や画像情報などから症状・障害を推測し医学的に考察できる			
15	医用画像 ②				
教科書	病気がみえる vol.7 脳・神経		履修条件	15回の講義なので，4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜提示		留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考	筋ジストロフィーやALSの特徴について理解できる				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
脳神経科学		千葉 馨 (実務経験教員)		1	1	後期
授業概要		脳科学の時代のとなっている昨今，リハビリテーションおよび臨床研究に生かすことができる脳科学の知識について論じる				
到達目標		脳機能と働きについて身体と感覚の観点から理解できる				
授業計画						
1	脳神経科学オリエンテーション		作業療法士が脳機能と脳科学について学ぶ意義を理解できる			
2	脳解剖と働き		脳の解剖と機能局在を中心とした働きについて理解できる			
3	脳と感覚		感覚、知覚、認知について理解できる 2点識別演習を通して感覚について学ぶ			
4	脳と記憶		脳の働きの主軸である記憶について理解できる 記憶の種類と記憶と脳の関係について理解できる			
5	神経の可塑性①		神経の可塑性について概要を理解できる。学習理論の復習をとおして脳の可塑性を理解できる。			
6	神経の可塑性②		非陳述記憶の研究を通し、神経の可塑性について理解を深めることができる。			
7	神経の可塑性③		神経の可塑性についてシナプス間でどのような変化が起きているのかを理解できる			
8	中間テスト 身体図式と身体イメージ		身体図式と身体イメージについて理解できる			
9	運動制御と身体イメージ ②		空間処理情報に基づいた手の制御システムについて理解できる			
10	運動制御と身体イメージ ③		身体所有間について理解できる			
11	運動主体感 ①		運動主体感とは何か，7またその責任領域（運動イメージの神経基盤と脳機能について）についての理解ができる			
12	運動主体感 ②		運動イメージを育むためのリハビリテーションについて理解できる			
13	運動学習の神経メカニズム		運動学習とシーケンスについて理解できる			
14	脳神経科学に基づいたリハビリテーション①		ニューロリハビリテーションについて理解できる CI療法、川平法			
15	脳神経科学に基づいたリハビリテーション②		ニューロリハビリテーションについて理解できる BMIやロボットリハ			
教科書		適宜，資料を配布する		履修条件		1/5以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		リハビリテーションのための 脳・神経科学入門 第2版		留意事項等		脳機能について講義内の知識を補完すること
成績評価		・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・中間テスト30点、期末テスト70点のトータル100点で成績を判定する				
備考						

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
症例検討演習Ⅰ	千葉馨・山田竜大・佐藤速太・西村大地 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について考えを表出できるよう演習を行うので活発な発言を期待する			
到達目標	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について分析・考察し、考えを表出できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	他職種連携を主体に考え、合理的かつ実践的なチーム医療について理解できる		
2	役割分担について ①	OT・PT・STの分業や協業について事例に基づき学習し理解できる		
3	役割分担について ②	OT・PT・STの分業や協業、さらに多職種との具体的な分業について理解できる		
4	症例検討 ①	脳卒中片麻痺の症例についてディスカッションおよび発表できる（症例は若年層）		
5	症例検討 ②	脳卒中片麻痺の症例についてディスカッションおよび発表できる（症例は高齢者）		
6	症例検討 ③	進行性神経難病の症例についてディスカッションおよび発表できる		
7	症例検討 ④	脊髄損傷（頸髄損傷）の症例についてディスカッションおよび発表できる		
8	症例検討 ⑤	脊髄損傷（腰髄損傷）の症例についてディスカッションおよび発表できる		
教科書	配布資料にて対応する	履修条件	1/5以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	提出物、講義態度を総合評価して判定する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
症例検討演習Ⅱ	千葉馨・山田竜大・佐藤速太・西村大地 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について考えを表出できるよう演習を行うので活発な発言を期待する			
到達目標	同職種、他職種との連携を主体にケース課題や事例について分析・考察し、考えを表出できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	他職種連携を主体に考え、合理的かつ実践的なチーム医療について理解できる		
2	症例検討 ①	整形外科疾患の症例についてディスカッションおよび発表できる		
3	症例検討 ②	回復期リハビリの症例において、OT・PT・STの役割をディスカッションできる		
4	症例検討 ③	回復期リハビリの症例について、OT・PT・STの役割を発表できる		
5	症例検討 ④	回復期リハビリの症例について、OT・PT・STの具体的な目的と介入法を発表できる		
6	症例検討 ⑤	認知症の症例についてOT・PT・STの役割をディスカッションできる		
7	症例検討 ⑥	認知症の症例についてOT・PT・STの具体的な目的と介入法を発表できる		
8	症例検討 ⑦	精神科領域の症例（デイケア患者も含む）についてディスカッションおよび発表ができる		
8	症例検討 ⑧	実習前における症例検討について		
教科書	配布資料にて対応する	履修条件	1/5以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	提出物、講義態度を総合評価して判定する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
リハビリテーション概論	佐藤 速太 (実務経験教員)	1	1	前期
授業概要	リハビリテーションの理念・概要について、PT・OTとリハビリテーションに関わる専門職との連携などについて理解できるよう講義・グループワークを行う。			
到達目標	リハビリテーションの理念をふまえ、具体的な障害例に対するリハビリテーションに関わる専門職との連携などについて理解できる。			
授業計画				
1	リハビリテーションとは	リハビリテーションの語源・定義、目的について理解する。		
2	医療・福祉に関わる専門職・チーム医療	医療及び保健・社会福祉に関わる専門職とチーム医療について調べる。		
3	障害モデル	障害モデル（ICIDH、ICF）について理解できる。		
4	障害モデル	障害モデル（ICIDH、ICF）について理解できる。		
5	ICFフレームワーク	症例を通してICFフレームワークを実践できる。		
6	ノーマライゼーション	ノーマライゼーション、バリアフリー、ユニバーサルデザインについて理解できる。		
7	リハビリテーションと地域貢献	リハビリテーションについて病院の中以外での活用方法を考える。		
8	総合演習	これまで学んできたことをもとに、リハビリテーションについて説明することができる。		
教科書	必要に応じて提示する	履修条件	8回の講義なので3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	必要に応じて提示する	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・グループワークや課題への取り組み、テストを成績に反映する。			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名		単位	配当年次
リハビリテーション医学	石田 裕二 (実務経験教員)		1	1
授業概要	リハビリテーション医学が対象とする疾患、脳卒中、頭部外傷、脊髄損傷、脳性麻痺、変性疾患、切断等についてそれらを理解し、リハビリテーションについて考えられるよう講義を行う			
到達目標	リハビリテーション医学が対象とする疾患、脳卒中、頭部外傷、脊髄損傷、脳性麻痺、変性疾患、切断等についてそれらを理解できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	リハビリテーションを学ぶにあたり、基本的な用語やポイントについて理解できる		
2	リハビリテーションに深く かかわる解剖生理学①	2回にわたり、筋骨格系の構造と機能（筋収縮や関節運動など）、神経系の構造と機能（上位運動ニューロンと下位運動運動ニューロン 脳神経など）を具体的な症状と照らし合わせて理解できる		
3	リハビリテーションに深く かかわる解剖生理学②			
4	脳血管疾患 ①	CI(脳梗塞)、CH(脳出血)、SAH(クモ膜下出血)等について学習し、リハビリテーションに関係する症状について概略を理解できる		
5	脳血管疾患 ②	症状と脳の機能局在の関係性を学習し、脳血管疾患が引き起こす症状について理解できる		
6	脳血管疾患 ③	脳血管疾患により出現する様々な臨床症状について理解できる		
7	認知症	認知症の分類、症状について理解し、患者への介入法の概要を理解できる		
8	脊髄損傷 ①	脊損の病理、高位診断と残存機能の関係について理解できる		
9	脊髄損傷 ②	残存機能とADLの関係、OT/PTの介入の方法について理解できる		
10	神経筋疾患 ①	神経原性の変性疾患を中心に学習し、理解を深める		
11	神経筋疾患 ②	筋原性の疾患を中心に学習し、理解を深める		
12	内部障害 ①	呼吸器系の疾患について理解を深める		
13	内部障害 ②	循環器（心臓を中心に）の疾患について理解ができる		
14	内部障害 ③	膠原病や代謝性疾患（糖尿病など）について理解できる		
15	整形外科疾患	RA、OA、FF(大腿骨々折)、切断・離断、肩関節障害などについて理解できる		
教科書	PT・OT・ST・ナースを目指す人のための リハビリテーション総論 要点整理と用語解説 改訂第3版		履修条件	15回の講義なので4回以上欠席 すると定期試験を受験できない
参考書	必要に応じて提示する		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を 怠らないこと
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
地域包括ケアシステム論		工藤 達也 (実務経験教員)		1	2	後期
授業概要		医療・福祉、地域リハビリテーションを担う様々な専門職の役割を理解できるような授業を展開し、多職種連携による包括的な地域医療福祉活動の必要性を論じる				
到達目標		地域包括ケアシステムにおける医療の役割や医療福祉連携について理解できる				
授業計画						
1	地域包括ケアシステムⅠ	地域包括ケアシステムの概念や背景、現代における地域包括ケアシステムの重要性について理解できる				
2	地域包括ケアシステムⅡ	地域包括支援センターの役割や地域包括ケア会議の概要を理解できる				
3	ニーズの把握と理解	対象者(生活者)のニーズの捉え方やアプローチ方法を理解できる				
4	地域包括ケアシステムにおけるセラピストの役割	地域包括における理学療法士、作業療法士の役割を理解できる				
5	多職種連携・チームアプローチ	多職種連携・チームアプローチの理念と意義について理解できる				
6	地域包括ケアシステムにおける社会福祉士の役割	地域包括ケアシステムにおける社会福祉士の役割について理解できる				
7	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割について理解できる				
8	地域包括ケアシステムにおけるケアマネジャーの役割	地域包括ケアシステムにおけるケアマネジャーの役割について理解できる				
9	多職種連携演習Ⅰ	多職種連携演習(グループワーク)を通じて、多職種連携の重要性や各職種の役割を理解できる				
10	多職種連携演習Ⅱ					
11	多職種連携演習Ⅲ					
12	多職種連携演習Ⅳ					
13	多職種連携演習Ⅴ					
14	多職種連携演習Ⅵ					
15	まとめ	多職種連携における各職種の役割および包括的な地域医療福祉活動の必要性を理解できる				
教科書		検討中		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書		地域包括ケアにおけるPT・OTの役割 個別地域ケア会議・介護予防事業から学ぶ		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価		15回の講義のなかで、適宜課題を実施し、課題提出や内容を総合して成績に反映させる				
備考		グループワークも適宜行う				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
作業療法概論	西村 大地 (実務経験教員)	2	1	前期
授業概要	作業療法の成り立ちや歴史について、また社会における役割について理解できるよう講義を行う			
到達目標	作業療法の成り立ちや歴史について、また社会における役割について理解できる			
授業計画				
1	オリエンテーション	作業療法概論で学習する内容や基礎科目との関連性を理解する		
2	リハビリテーションとは	リハビリテーションとは何かについて理解する		
3	作業療法とは	作業療法とは何かについて理解する		
4	作業療法の領域と対象	作業療法の領域と対象・プロセスについて理解する		
5	人の生活を構成する作業活動	生活を構成する作業活動について理解する		
6	作業療法の枠組み	作業療法の枠組みについて理解する		
7	世界の作業療法の歴史	日本と世界の作業療法の歴史について理解する		
8	日本の作業療法の歴史			
9	ICIDHとICF①	ICIDHとICFについて理解する		
10	ICIDHとICF②			
11	作業療法実践（身体障害）①	作業療法の介入の具体例を知り、身体障害領域において中枢神経障害の作業療法とはどのようなことを行うのか、その概要を理解する		
12	作業療法実践（身体障害）②			
13	作業療法実践（身体障害）③	作業療法の介入の具体例を知り、身体障害領域において運動器障害、内部障害の作業療法とはどのようなことを行うのか、その概要を理解する		
14	作業療法実践（身体障害）④			
15	作業療法実践（発達障害）①	作業療法の介入の具体例を知り、発達障害領域の作業療法とはどのようなことを行うのか、その概要を理解する		
16	作業療法実践（発達障害）②			
17	作業療法実践（精神障害）①	作業療法の介入の具体例を知り、精神障害領域の作業療法とはどのようなことを行うのか、その概要を理解する		
18	作業療法実践（精神障害）②			
19	作業療法実践（地域）①	作業療法の介入の具体例を知り、地域作業療法とはどのようなことを行うのか、その概要を理解する		
20	作業療法実践（地域）②			
21	我が国の医療福祉制度①	医療保険と介護保険、診療報酬と介護報酬、個人情報保護法等の概要を理解する		

22	我が国の医療福祉制度②	医療保険と介護保険、診療報酬と介護報酬、個人情報保護法等の概要を理解する		
23	言語聴覚士について①	言語聴覚士とはどのような職種か理解する		
24	言語聴覚士について②			
25	計画立案	作業療法士や作業療法についてグループワークを通して具体的な内容を理解する		
26	グループワーク			
27	グループワーク	作業療法士や作業療法についてグループワークを通して具体的な内容を理解する		
28	グループワーク			
29	作業療法発表会	作業療法士や作業療法についてのプレゼンテーションを通して具体的な内容を理解し、各グループの考えを共有する また質疑応答を通して本講義を振り返る		
30	作業療法発表会			
教科書		適宜資料を配布する	履修条件	30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		作業療法概論 第4版（医学書院） 作業療法概論（中山書店）	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価		発表内容・グループワーク：40％ 定期試験：60％		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
基礎作業療法学Ⅰ	山田 竜大 (実務経験教員)	2	1	後期
授業概要	作業行為を実際に行い，作業分析・動作分析の視点を養うよう講義演習を行う			
到達目標	各種の作業行為を実際に行い，作業分析・動作分析の結果から作業療法の効果を推定できるようになる			
授業計画				
1	オリエンテーション	本授業の概要，学習目標・内容，スケジュール，学習方法等の説明と，基礎作業療法学という学問領域について理解できる		
2	集団療法	集団療法の技法や効果について理解し、実際に実施計画書を作成することにより精神心理的側面，身体的側面に対する治療効果を考えることができる		
3	籐細工①	籐細工の作成計画，材料・道具の選定，制作過程を通じて，精神心理的側面および身体的側面に対する治療的効果を考えることができる		
4	籐細工②			
5	籐細工③			
6	籐細工④			
7	レクリエーション①	レクリエーション（軽スポーツや各種行事なども含む）を治療的意味を考慮しながら立案・計画し，実際に演習することにより精神心理的側面，身体的側面に対する治療効果を考えることができる		
8	レクリエーション②			
9	レクリエーション③			
10	レクリエーション④			
11	木工①	木工の作成計画,材料・道具の選定,木工の制作過程を通じて,精神心理的側面および身体的側面に対する治療的効果を考えることができる		
12	木工②			
13	木工③			
14	木工④			
15	ネット手芸①	ネット手芸の作成計画，制作過程を通じて，精神心理的側面および身体的側面に対する治療的効果を考えることができる		
16	ネット手芸②			
17	ネット手芸③			
18	ネット手芸④			
19	レザークラフト①	レザークラフトの作成計画，材料・道具の選定，制作過程を通じて，精神心理的側面		
20	レザークラフト②			

21	レザークラフト③	および身体的側面に対する治療的效果を考えることができる		
22	レザークラフト④			
23	作業分析	作業分析の各項目の内容や留意点を理解し，還元的要素にとらわれず全体の相互性にも注意を向けながら作業分析を行うことができる		
24				
25	織物①	織物の作成計画，材料・道具の選定，織る過程を通じて，精神心理的側面および身体的側面に対する治療的效果を考えることができる		
26	織物②			
27	織物③			
28	織物④			
29	織物⑤			
30	織物⑥			
教科書		資料を配布する	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価		・ 30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
基礎作業療法学Ⅱ	山田 竜大 (実務経験教員)	2	2	前期
授業概要	作業行為を実際に行い，作業分析・動作分析の視点を養うよう講義演習を行う			
到達目標	各種の作業行為を実際に行い，作業分析・動作分析の結果から作業療法の効果を推定できるようになる			
授業計画				
1	総論①	作業療法にはなぜ理論が必要かを理解することができる		
2	総論②			
3	作業療法における理論①	作業療法の理論とその歴史を理解することができる		
4	作業療法における理論②			
5	人間作業モデル①	人間作業モデルの概要について理解することができる		
6	人間作業モデル②			
7	カナダモデル①	カナダモデルの概要について理解することができる		
8	カナダモデル②			
9	その他理論①	各種作業療法理論についての理論的背景と具体的な評価方法,判定と治療への応用について理解できる		
10	その他理論②			
11	作業分析①	作業分析とはなにかを理解し，指定された課題に対して実際に分析を行うことができる		
12	作業分析②			
13	七宝焼き①	七宝焼きの作成計画，材料・道具の選定を通じて，精神心理的側面および身体的側面に対する治療的効果を考えることができる		
14	七宝焼き②			
15	七宝焼き③			
16	七宝焼き④			
17	木工①	木工の作成計画，材料・道具の選定，織る過程を通じて，精神心理的側面および身体的側面に対する治療的効果を考えることができる		
18	木工②			
19	木工③			
20	木工④			

21	陶芸①	陶芸作品の作成計画,材料・道具の選定,練りや成形課程通じて精神心理的側面および身体的側面に対する治療的效果を得ることができる		
22	陶芸②			
23	陶芸③			
24	陶芸④			
25	陶芸⑤			
26	陶芸⑥			
27	タイルモザイク①	タイルモザイクの作成計画, 材料・道具の選定を通じて, 精神心理的側面および身体的側面に対する治療的效果を考えることができる		
28	タイルモザイク②			
29	タイルモザイク③			
30	タイルモザイク④			
教科書		資料を配布する	履修条件	30回の講義なので, 7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず, 予習復習を怠らないこと
成績評価		・ 30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
作業療法評価学演習Ⅰ	西村大地・佐藤速太 (実務経験教員)		2	1	後期
授業概要	評価は、効果的な作業療法を実施するうえできわめて重要な作業療法プロセスに位置づけられる。本科目では、評価の意義や目的、その一連の進め方について学習する。また、作業療法における基本的検査・測定技術である形態計測法、関節可動域測定法、筋力測定法について講義および演習を通して習得する。				
到達目標	作業療法評価における各種検査・測定手技（形態計測、関節可動域測定、筋力測定法）を学び、その基本的手技を実施できるようになる。				
授業計画					
1	オリエンテーションおよび 評価学概論	本授業の概要、学習目標・内容、スケジュール、学習方法の説明、評価とは何かを理解できる			
2	一般的評価事項	問診・観察・面接（すべての始まり）を通して、「見立て」にはどのような情報が必要か理解できる			
3	形態計測 ①	身長、体重、体格指数、四肢長、周径の計測を演習し、その正確な手法を習得し、測定値の臨床的意味について理解できる			
4	形態計測 ②				
5	関節可動域測定概論	関節可動域測定の概要について学び、方法と目的を理解できる			
6	関節可動域総合演習 ①	肩甲帯・肩関節のROM測定を演習し、手技を習得できる			
7	関節可動域総合演習 ②	前腕・手関節のROM測定を演習し、手技を習得できる			
8	関節可動域総合演習 ③	股・膝関節のROM測定を演習し、手技を習得できる			
9	関節可動域総合演習 ④	足関節のROM測定を演習し、手技を習得できる			
10	関節可動域総合演習 ⑤	頸部のROM測定を演習し、手技を習得できる			
11	関節可動域総合演習 ⑥	胸腰部のROM測定を演習し、手技を習得できる			
12	関節可動域総合演習 ⑦	手指のROM測定を演習し、手技を習得できる			
13	関節可動域総合演習 ⑧	これまでのROM測定を復習し、他者に実践できる			
14	関節可動域総合演習 ⑨				
15	関節可動域測定実技試験①	実技として十分な手技を習得しているか、実技試験を通して判定する			
16	関節可動域測定実技試験②				
17	徒手筋力検査概論	徒手筋力検査の概要について学び、方法と目的を理解できる			
18	徒手筋力検査総合演習 ①	体幹・肩甲帯のMMT測定を演習し、手技を習得できる			
19	徒手筋力検査総合演習 ②	肩関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる			

20	徒手筋力検査総合演習 ③	肩関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
21	徒手筋力検査総合演習 ④	肘関節、前腕のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
22	徒手筋力検査総合演習 ⑤	手関節、手指のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
23	徒手筋力検査総合演習 ⑥	股関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
24	徒手筋力検査総合演習 ⑦	股・膝関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
25	徒手筋力検査総合演習 ⑧	足関節のMMT測定を演習し、手技を習得できる	
26	徒手筋力検査総合演習 ⑨	これまでの徒手筋力検査を復習し、他者に実践できる	
27	徒手徒手筋力検査実技試験 ①	実技として十分な手技を習得しているか、実技試験を通して判定する	
28	徒手徒手筋力検査実技試験 ②		
29	触診①	筋・神経の走行から正しく触診を行うことができる	
30	触診②	筋・神経の走行から正しく触診を行うことができる	
教科書	・新徒手筋力検査法（第10版） ・運動療法のための解剖学的触診技術上肢 ・運動療法のための解剖学的触診技術体幹下肢 ・作業療法評価学（標準作業療法学 専門分野）	履修条件	30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	・30回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テスト、実技試験、期末テストの結果と出席率を総合して成績に反映させる		
備考			

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
作業療法評価学演習Ⅱ		西村 大地 佐藤 速太 (実務経験教員)		2	2	前期
授業概要		評価の意義や目的、その一連の進め方について学習する。また、作業療法における基本的検査・測定技術について講義および演習を通して習得する。				
到達目標		作業療法評価を実施するために、各種検査法を理解し、実施することができる。				
授業計画						
1	オリエンテーション	本講義の概要と、学習方法について理解する				
2	バイタルサイン	バイタルサインの目的を説明し、測定を実施する				
3	反射検査	表在反射、深部反射、病的反射の目的を説明し、基本的手技を実施する				
4						
5	感覚検査①	感覚検査の目的を説明し、基本的手技を実施する				
6						
7	感覚検査②	感覚検査の目的を説明し、基本的手技を実施する				
8						
9	協調性検査	失調や協調性障害の症状、目的を説明し、基本的手技を実施する				
10						
11	筋緊張検査	筋緊張検査の目的を理解し、基本的手技を実施する				
12						
13	脳神経検査①	脳神経検査の目的を説明し、基本的手技を実施する				
14						
15	脳神経検査②	脳神経検査の目的を説明し、基本的手技を実施する				
16	疼痛検査	疼痛検査の目的を説明し、基本的手技を実施する				
17	プレOSCE①	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う				
18	プレOSCE②	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う				

19	プレOSCE③	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う		
20	プレOSCE④	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う		
21	中間OSCE	これまで学習した各検査のOSCEを実施する		
22	中間OSCE	これまで学習した各検査のOSCEを実施する		
23	運動麻痺検査①	運動麻痺検査の目的を説明し、基本的手技を実施する		
24	運動麻痺検査②	運動麻痺検査の目的を説明し、基本的手技を実施する		
25	運動麻痺検査③	運動麻痺検査の目的を説明し、基本的手技を実施する		
26	運動麻痺検査④	運動麻痺検査の目的を説明し、基本的手技を実施する		
27	プレOSCE⑤	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う		
28	プレOSCE⑥	各検査を他者に説明し、同意を得たうえで実施し解釈するための演習を行う		
29	期末OSCE	これまで学習した各検査のOSCEを実施する		
30	期末OSCE	これまで学習した各検査のOSCEを実施する		
教科書		作業療法評価学 第4版（医学書院）	履修条件	30回講義のため、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		神経診察クロズアップ：正しい病巣診断のコツ 第3版（メジカルビュー社）	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価		OSCE（60％） 期末試験（40％）		
備考		実技を行うことが多いため、各自動きやすい服装で参加すること。		

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
作業療法評価学演習Ⅲ		西村大地・佐藤速太 (実務経験教員)		2	2	後期
授業概要		障害の種類や程度を精査し具体的な問題点の抽出を図るための評価法を学ぶ また、これまで修得した知識を整理し、技能の向上および患者とのコミュニケーション、知識の具現化を図る				
到達目標		これまで学内で修得してきた知識ならびに技術の総まとめを行い、臨地実習を円滑に実施できるようになる				
授業計画						
1	オリエンテーション	作業療法における評価についてその立ち位置と目的を再確認する				
2	オリエンテーション	作業療法における評価についてその立ち位置と目的を再確認する				
3	COPM・CAOD	作業に焦点を当てた介入を可視化するCOPM・CAODの概要を学び実践できる				
4	MAL・JASMID	上肢機能の質を評価するMAL・JASMIDの概要を学び他者に実践できる				
5	HDS-R・TMT-J・S-PA	高次脳機能障害の検査であるHDS-R・TMT-J・S-PAの概要を学び他者に実践できる				
6	レーブン色彩マトリックス検査	高次脳機能障害の検査であるレーブン色彩マトリックス検査の概要を学び他者に実践できる				
7	BIT・FAB	高次脳機能障害の検査であるBIT・FABの概要を学び他者に実践できる				
8	BIT・FAB	高次脳機能障害の検査であるBIT・FABの概要を学び他者に実践できる				
9	Kohs立方体組み合わせテスト・ベントン	高次脳機能障害の検査であるKohs立方体組み合わせテスト・ベントン視覚記銘検査の概要を学び他者に実践できる				
10	Kohs立方体組み合わせテスト・ベントン	高次脳機能障害の検査であるKohs立方体組み合わせテスト・ベントン視覚記銘検査の概要を学び他者に実践できる				
11	WMS-R・WAIS-IV	高次脳機能障害の検査であるWMS-R・WAIS-IVの概要を学び他者に実践できる				
12	WMS-R・WAIS-IV	高次脳機能障害の検査であるWMS-R・WAIS-IVの概要を学び他者に実践できる				
13	WMS-R・WAIS-IV	高次脳機能障害の検査であるWMS-R・WAIS-IVの概要を学び他者に実践できる				
14	WMS-R・WAIS-IV	高次脳機能障害の検査であるWMS-R・WAIS-IVの概要を学び他者に実践できる				
15	まとめ①	ポートフォリオ作成，口頭試問				
16	まとめ②	ポートフォリオ作成，口頭試問				
17	総合演習Ⅰ－①	模擬症例と作業療法士を学生が演じ，疾患の理解と評価項目の立案を行うことができる(脳血管系疾患症例)				
18	総合演習Ⅰ－②	模擬症例と作業療法士を学生が演じ，疾患の理解と評価項目の立案を行うことができる(脳血管系疾患症例)				

19	総合演習Ⅰ－③	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(脳血管系疾患症例)		
20	総合演習Ⅰ－④	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(脳血管系疾患症例)		
21	総合演習Ⅰ－⑤	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(脳血管系疾患症例)		
22	総合演習Ⅰ－⑥	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(脳血管系疾患症例)		
23	総合演習Ⅰ－⑦	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(脳血管系疾患症例)		
24	総合演習Ⅱ－①	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、疾患の理解と評価項目の立案を行うことができる(整形疾患症例)		
25	総合演習Ⅱ－②	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、疾患の理解と評価項目の立案を行うことができる(整形疾患症例)		
26	総合演習Ⅱ－③	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(整形疾患症例)		
27	総合演習Ⅱ－④	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(整形疾患症例)		
28	総合演習Ⅱ－⑤	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(整形疾患症例)		
29	総合演習Ⅱ－⑥	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(整形疾患症例)		
30	総合演習Ⅱ－⑦	模擬症例と作業療法士を学生が演じ、評価を実践することができる(整形疾患症例)		
教科書		・ 作業療法評価学(標準作業療法学 専門分野)	履修条件	30回の講義なので、7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		未定	留意事項等	実技練習は適宜行うこと
成績評価		・ ポートフォリオ、口頭試問、演習課題並びに取り組み状況、出席を総合的に判断し成績に反映する。		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
神経障害作業療法治療学	西村 大地 (実務経験教員)		1	2	後期
授業概要	リハビリテーションの中核的対象となる神経障害について深く学び、治療技術を臨床に反映できるよう実践的な内容を学ぶ				
到達目標	様々な神経症候を医学的に解釈・統合し具体的な治療に反映できるようになる				
授業計画					
1	脳血管障害の作業療法①	脳卒中における作業療法治療・介入方法の概要を学ぶ			
2	脳血管障害の作業療法②	急性期における作業療法の治療法、リスク管理を学ぶ			
3	脳血管障害の作業療法③	回復期における作業療法を学ぶ			
4	脳血管障害の作業療法④	生活期における作業療法を学ぶ			
5	脳血管障害の作業療法⑤	脳卒中における評価、治療の推奨や予後予測を学ぶ			
6	脳血管障害の作業療法⑥	FMAについて学ぶ			
7	認知症	認知症の分類、認知症を呈する疾患について基本的な理解を深める			
8	神経筋疾患	ギランバレー、多発性硬化症、重症筋無力症の作業療法を学ぶ			
9	神経変性疾患①	パーキンソン病の作業療法を学ぶ			
10	神経変性疾患②	脊髄小脳変性症、筋萎縮側索硬化症の作業療法を学ぶ			
11	頭部外傷	頭部外傷の作業療法の治療を学ぶ			
12	神経学的アセスメント ①	神経障害を的確にアセスメントしADLとの関連性を考察できるようになる			
13	神経学的アセスメント ②	問題点を論理的に抽出し、治療計画が立案できるようになる			
14	神経学的アセスメント ③	画像診断学的視点で医学的情報から障害像を推測できるようになる			
15	臨床神経学	神経障害で発生する症状・徴候について包括的に解釈できるようになる			
教科書	身体機能作業療法学 第4版（医学書院）		履修条件	15回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	脳卒中 基礎知識から最新リハビリテーションまで (医歯薬出版株式会社)		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	期末試験100%				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
神経障害作業療法治療学演習	佐藤 速太 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	神経障害作業療法治療学で学習する知識をふまえ、具体的なリハビリテーションについて論じ、臨床的な評価、治療の技能を身に着けることができるよう演習する			
到達目標	様々な神経障害患者への機能的作業療法や生活リハビリテーションを計画、実施することができるようになる			
授業計画				
1	姿勢反射	姿勢反射や原始反射の基本動作への影響について考察できる		
2	基本動作 ①	基本動作の障害を神経学的、発達学的、障害学的に分析できる		
3	基本動作 ②	正常な基本動作パターンを演習の中で理解できる		
4	基本動作 ③	基本動作の障害に対応して運動療法的な介入ができるようになる		
5	歩行 ①	正常歩行と異常歩行の相違点を分析・解釈できる		
6	歩行 ②	異常歩行に対するアプローチを立案・実施できるようになる		
7	機能的作業療法 ①	中枢神経性麻痺に対するアプローチ（随意収縮、分離促通）ができるようになる		
8	機能的作業療法 ②	末梢神経性麻痺に対するアプローチができるようになる		
9	機能的作業療法 ③	錐体外路障害や小脳症状に対するアプローチができるようになる		
10	非運動性障害	感覚障害、覚醒レベルの低下などに対するアプローチができるようになる		
11	高次脳機能障害	失認、失行、失語のアセスメントや治療的介入ができるようになる		
12	脊髄損傷 ①	機能維持・向上を目的としたアプローチを理解できる		
13	脊髄損傷 ②	ADLを見据えた在宅でのアプローチの立案ができるようになる		
14	フィジカルアセスメント ①	リスク管理、全身的な生体機能の管理ができるようになる		
15	フィジカルアセスメント ②	神経障害（進行性疾患も含む）の患者に対するアセスメントができるようになる		
教科書	検討中	履修条件	15回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・ 15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
内部障害作業療法治療学	石田 裕二 (実務経験教員)		1	2	後期
授業概要	高齢者や在宅のクライアントによくみられる内部障害について深く学び、治療技術を臨床に反映できるように実践的かつ臨床的な内容を学ぶ				
到達目標	様々な内科的問題を医学的に解釈・統合し具体的な治療に反映できるようになる				
授業計画					
1	オリエンテーション	作業療法士が深くかかわる内部障害（内科系疾患）と、リハビリテーションの目的について理解できる			
2	バイタルサインと内部障害	バイタルサインについて、呼吸・脈拍・血圧・聴診法の意義と方法を理解できる			
3	喀痰と吸引	喀痰と吸引の臨床的意義と方法を理解できる			
4	褥瘡と体位変換	褥瘡の処置と関わりについて理解できる			
5	経管栄養及び感染対策	点滴、胃ろう、経鼻栄養、清潔区域（滅菌消毒ガウンテクニック）、感染予防について理解できる			
6	糖尿病 ①	糖尿病（高血糖症）の病理や内科的治療について理解できる			
7	糖尿病 ②	糖尿病に対する運動指導、生活指導について理解できる			
8	腎疾患	慢性腎不全の病態、透析患者へのアプローチについて理解できる			
9	がん	緩和ケアを含めたがんへの対応、QOLをふまえた介入法について理解できる			
10	呼吸器疾患 ①	呼吸不全の循環器への影響、酸塩基平衡への影響について説明できる			
12	呼吸器疾患 ②	慢性呼吸器疾患に対するリハビリテーションについて説明できる			
13	循環器疾患 ①	虚血性心疾患の特徴を理解し説明できる			
14	循環器疾患 ②	多くの臨床情報をもとに全身状態のアセスメントできるようになる			
15	高齢者の運動機能障害 ①	長期臥床や廃用の影響を評価し治療プログラムを立案できる			
16	高齢者の運動機能障害 ②	フレイルやサルコペニアについてそれらの概念を学習する			
教科書	なるほどなっとく内科学改訂2版 南山堂		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	必要に応じて提示する		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
精神障害作業療法治療学Ⅰ	山田 竜大 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	作業療法の視点において評価の観点から疾患への理解を深め、実践できる姿勢を養えるよう講義を行う			
到達目標	評価の観点から疾患への理解を深め、実践できるようになる			
授業計画				
1	気分障害 ①	うつ病の疾患特性、評価の視点を考えることができる		
2	気分障害 ②	躁病・双極性障害の疾患特性、評価の視点を考えることができる		
3	統合失調症 ①	統合失調症の疾患特性、評価の視点を考えることができる		
4	統合失調症 ②	統合失調症に関連する疾患の特性、評価の視点を考えることができる		
5	パーソナリティ障害 ①	パーソナリティ障害の分類と特徴を理解することができる		
6	パーソナリティ障害 ②	パーソナリティ障害の分類と特徴から、評価の視点を考えることができる		
7	神経症性障害、ストレス 関連障害・身体表現性障害	各種疾患を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
8	生理的障害及び身体要因に 関連した行動症候群	各種疾患を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
9	発達障害 ①	発達障害の特性を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
10	発達障害 ②	発達障害の特性を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
11	認知症 ①	各種認知症の分類と特徴を理解することができる		
12	認知症 ②	認知症の分類と特徴から、評価の視点を考えることができる		
13	てんかん	てんかんの特徴、発作、症状を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
14	精神作用物質による精神 及び行動の障害	各種疾患を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
15	前頭葉障害	疾患を深く理解し、評価の視点を考えることができる		
教科書	精神科作業療法の理論と技術	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	標準精神医学第7版, 精神障害作業療法第2版	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テスト（中間・期末）の結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
精神障害作業療法治療学Ⅱ	山田 竜大 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	各疾患の基本的知識を踏まえ、作業療法の実践的思考が養えるよう講義を行う			
到達目標	各疾患の治療について考え、治療計画を立てられるようになる			
授業計画				
1	精神障害総論 ①	種々の作業療法に関する理論、作業療法を取り巻く制度等を述べられる		
2	精神障害総論 ②	種々の作業療法に関する理論、作業療法を取り巻く制度等を述べられる		
3	統合失調症の作業療法 ①	事例をもとに統合失調症の回復段階毎の作業療法を述べられる		
4	統合失調症の作業療法 ②	事例をもとに統合失調症に関連する疾患の作業療法を述べられる		
5	気分障害の作業療法 ①	事例をもとにうつ病についての作業療法を、回復段階毎に述べられる		
6	気分障害の作業療法 ②	事例をもとに躁病・双極性障害についての作業療法を述べられる		
7	神経症性障害の作業療法	事例をもとに神経症性障害についての作業療法を述べられる		
8	パーソナリティ障害の作業療法	事例をもとに各種パーソナリティ障害への対応と作業療法を述べられる		
教科書	検討中	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・ 8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
老年期作業療法治療学	千葉 馨 (実務経験教員)		1	2	後期
授業概要	加齢に伴う心身機能の変化の特徴，疾患や障害について理解し，全人間的な介入法を考えられるように講義を行う				
到達目標	老年期の心身機能の特徴，生活習慣や環境，QOLの維持向上に直結する役割行動などを理解し，具体的な作業療法や在宅リハについて考察できるようになる				
授業計画					
1	総論	老年期の心身機能の変化について，その概略が理解できる			
2	高齢者の社会的役割	人生経験を積み上げた高齢者の役割の重要性について理解できる			
3	社会活動の重要性	社会交流の場を保証し，QOLの維持向上に向けた作業療法士の取り組みについて理解できる			
4	高齢者の生活について	稼働年齢をこえた高齢者の生活活動について，様々なパターンを類推し，高齢者の心身の健康について理解できる			
5	高齢者の心理	高齢者の心理について理解できる			
6	高齢者の心肺機能	高齢者の心肺機能や背景にある内部疾患などについて理解できる			
7	高齢者の自律神経機能	若年者と比較した高齢者の自律神経機能について理解できる			
8	高齢者の筋力について	高齢者の筋力について，サルコペニアを例に挙げて低運動による障がいの本質を理解できる			
9	高齢者の栄養状態	高齢者の栄養状態について学習し，在宅リハにおける具体的なアセスメントや指導内容について理解できる			
10	高齢者の代謝	生理学的視点から高齢者の代謝機能の特徴について理解できる			
11	高齢者に対する作業療法 ①	虚弱高齢者に対する作業療法について，具体例を通して理解できる			
12	高齢者に対する作業療法 ②	高齢者のADLについて，具体例を通して理解できる			
13	高齢者に対する作業療法 ③	認知症の病態と作業療法の介入について理解できる			
14	高齢者に対する作業療法 ④	高齢者の「生きがい・楽しみ」について，その本質を理解できる			
15	高齢者に対する作業療法 ⑤	高齢者の運転に関する種々の問題について，作業療法の視点から考察できる			
教科書	検討中		履修条件	15回の講義なので，4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中		留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・ 15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
日常生活活動学	千葉 馨 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	リハビリテーションの目標である日常生活活動（Activities of Daily Living：ADL）について各障害の形態を理解した上で対象者の個別性を考慮した創造的な練習や支援を考える基礎となる。基礎疾患や障害等の基礎知識に基づいた生活および活動を促す方法を学ぶ			
到達目標	障害に至る基礎疾患等の知識を十分に学び、生活行為を構成する諸要素について理解できる対象者の個別性を考慮し主体的に生活できる方法を学ぶ			
授業計画				
1	ADLの概念と範囲	ADLの概念と範囲、生活昨日から見たADLの位置づけについて理解できる		
2	ADL評価	ADL評価の種類と評価ポイントについて理解できる		
3	脊髄損傷のADL 1	脊髄損傷の損傷レベル、残存機能と随伴症状の基本を学び、評価とリハビリテーションに連動したADL（起居動作方法）について理解できる		
4	脊髄損傷のADL 2	残存機能における活動状況に応じた医療福祉デバイスを理解できる		
5	脊髄損傷のADL 3	残存機能における活動状況に応じたIADL拡大の導入や方法を理解できる		
6	脳卒中片麻痺のADL 1	脳卒中の病態及び障害と片麻痺のADL評価残存機能における活動状況に応じた医療福祉デバイスを理解できる		
7	脳卒中片麻痺のADL 2	脳卒中の病態及び障害と片麻痺のADL評価残存機能における活動状況に応じた医療福祉デバイスを理解できる		
8	中間テスト 関節リウマチのADL1	関節リウマチの病態と片麻痺のADL評価残存機能における活動状況に応じた医療福祉デバイスを理解できる		
9	関節リウマチのADL2	関節リウマチの病態と片麻痺のADL評価残存機能における活動状況に応じた医療福祉デバイスを理解できる		
10	運動器疾患のADL	人工関節や関節疾患の慢性疼痛を持つ人々のADLについて理解できる		
11	パーキンソン病のADL	対象の病態を理解し、投薬状況及び身体活動状況に応じたADLについて理解できる		
12	認知症のADL	対象の病態を理解し、投薬状況及び身体活動状況に応じたADLについて理解できる		
13	心疾患のADL	対象の病態を理解し、投薬状況及び身体活動状況に応じたADLについて理解できる		
14	呼吸器疾患のADL	対象の病態を理解し、投薬状況及び身体活動状況に応じたADLについて理解できる		
15	回復期及び在宅におけるADL指導	対象者の居住地及び目標とする拠点を考慮したADL指導について理解できる		
教科書	PT・OTビジュアルテキスト ADL 第1版 羊土社		履修条件	前講義の1/5を欠席すると単位を取得できない
参考書	資料内に紹介する 多数あり		留意事項等	・適宜小テストを不定期に行うので授業で行った部分の理解・知識の補完を常に行うこと
成績評価	中間および期末試験、授業態度、提出物について成績の対象とする。 点以上「C評定」より単位修得となる			60
備考	授業終了後の理解度アンケート、不定期な小テスト等を実施する。 極的な質問を歓迎する。			種

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
日常生活活動学演習	千葉 馨 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	各疾患や障害の動作に対して分析的に観察し、表出することができ、治療的に系統立てた考えを持つことができるよう講義演習を行う			
到達目標	各疾患や障害の動作に対して分析的に観察し、表出することができ、治療的に系統立てた考えを持つことができる			
授業計画				
1	動作分析とは ①	動作分析について理解し、分析的な視点を持つことができる		
2	動作分析とは ②	動作分析について理解し、分析的な視点を持つことができる		
3	姿勢について	姿勢について理解し、分析的な視点を持つことができる		
4	座位について	座位について理解し、分析的な視点を持つことができる		
5	立位について	立位について理解し、分析的な視点を持つことができる		
6	寝返り	寝返りについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
7	起き上がり	起き上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
8	立ち上がり 座位から	座位からの立ち上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
9	立ち上がり 床から	床からの立ち上がりについて理解し、分析的な視点を持つことができる		
10	歩行 ①	歩行について理解し、分析的な視点を持つことができる		
11	歩行 ②	歩行について理解し、分析的な視点を持つことができる		
12	ADL動作 ①	ADL動作について理解し、分析的な視点を持つことができる		
13	ADL動作 ②	ADL動作について理解し、分析的な視点を持つことができる		
14	症例検討 ①	症例検討で動作分析をはじめとした評価を行い治療計画ができる		
15	症例検討 ②	症例検討で動作分析をはじめとした評価を行い治療計画ができる		
教科書	検討中	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
高次脳機能障害学	西村 大地 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	脳損傷に起因する高次脳機能障害の病態や症状、評価方法、リハビリテーションについて学ぶ			
到達目標	脳機能について理解し、高次脳機能障害の病態や症状、評価、リハビリテーションについて説明できる			
授業計画				
1	高次脳機能総論	授業の構成および成績評価に関するオリエンテーション、高次脳機能障害とはなにか学ぶ		
2	脳の機能について	脳の構造や部位ごとの働きについて学ぶ		
3	大脳の機能局在と障害	大脳の機能局在や各部位の障害、脳動脈の支配領域について学ぶ		
4	脳画像と高次脳機能障害	脳に関連する画像（CT・MRI）の見方や脳部位の同定方法について学ぶ		
5	高次脳機能障害の評価	高次脳機能障害の評価の原則やプロセス、阻害要因を学ぶ		
6	半側空間無視	半側空間無視の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
7	注意障害	全般性注意障害の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
8	記憶障害	記憶障害の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
9	視覚モダリティーにおける失認と関連症状	視覚モダリティーにおける失認と関連症状の特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
10	失認・失読・失書	失認・失読・失書の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
11	失行	失行の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
12	遂行機能障害	遂行機能障害の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
13	社会的行動障害	社会的行動障害の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
14	認知症	認知症の症状特性、神経心理学的検査、リハビリテーションについて学ぶ		
15	高次脳機能障害における法律や社会制度	高次脳機能障害における法律や社会制度について理解し、必要な支援やアプローチについて学ぶ		
教科書	高次脳機能障害学 第2版 (医歯薬出版株式会社)	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	高次脳機能障害作業療法学（医学書院）	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	期末試験100%			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名		単位	配当年次
コミュニケーション方法論演習	平塚 健太 (実務経験教員)		1	1
授業概要	現在はコミュニケーションの方法は多様化している。それぞれのコミュニケーション方法についての使用例から、さらに社会人としての伝達方法であるプレゼン、レポート、レジュメ作成までを理解し、実施できるよう学んでほしい（手紙の書き方も含める）。			
到達目標	それぞれのコミュニケーション方法についての使用例から、さらに社会人としての伝達方法であるプレゼン、レポート、レジュメ作成までを理解し、実施できる。			
授業計画				
1	コミュニケーションとは	コミュニケーションの定義と必要性を理解できる		
2	コミュニケーションの種類	様々なコミュニケーション方法について提示し、適用と適用外について述べる		
3	傾聴と質問	話の聞き方および質問の仕方を理解できる		
4	会話のルールと質問の仕方	会話のルールやマナー・良質な質問を理解し、実践できる		
5	異文化コミュニケーションと他者理解	様々な価値観を受け入れ、価値観を共有することができる		
6	レポートの書き方	レポートの書き方について理解し、実践できる		
7	資料の作り方とプレゼンテーション①	相手に伝わりやすい資料の作り方・プレゼンテーションを理解できる		
8	資料の作り方とプレゼンテーション②	相手に伝わりやすい資料の作り方・プレゼンテーションを理解し、実践できる		
教科書	資料を配布する		履修条件	PCを使用する 15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書	適宜		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
リハビリテーション管理学Ⅰ	山田 竜大 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	業務を実施するにあたり、リスクマネジメントや組織運営の観点からの個人の在り方までメタ認知を高めて行動できるよう講義を行う			
到達目標	業務を実施するにあたり、リスクマネジメントや組織運営の観点から、職場における個人の在り方について考えることができる			
授業計画				
1	作業療法管理学 総論	作業療法管理学の概念や背景について理解できる		
2	医療機関の分類と組織	医療機関の分類や組織構成・役割について理解できる		
3	医療保険制度	作業療法業務に必要な医療保険制度について理解できる		
4	介護保険制度と社会保障	作業療法業務に必要な介護保険制度と社会保障制度について理解できる		
5	介護予防の取り組み	地域の介護予防対策をセラピストの視点から考え、述べることができる		
6	診療・介護報酬制度①	リハビリテーション分野における収益構造を理解できる		
7	診療・介護報酬制度②	リハビリテーション分野における収益構造を理解できる		
8	組織	組織やチームについて理解できる		
教科書	リハビリテーション管理・運営実践ガイドブック	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	適宜提示	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
リハビリテーション管理学Ⅱ	山田 竜大 (実務経験教員)	1	2	後期
授業概要	管理・マネジメントについて職場から症例について範囲を広げて考えることができよう講義を行う			
到達目標	作業療法士の臨床現場における管理・マネージメント，リスク管理について，視野を広げて考えることができる			
授業計画				
1	総論	作業療法管理学Ⅱの位置づけや到達目標を理解できる		
2	組織	組織やチームについて理解し、考えを述べることができる		
3	業務管理・労務管理	人事考課・時間外労働などの仕組みやハラスメント等について理解できる		
4	リスク管理	医療安全・感染症管理・クレーム対応などのリスク管理を理解できる		
5	臨床実習教育	臨床実習の学習目的や内容を理解できる		
6	卒前・卒後教育①	生涯学習に至る教育体制や内容を理解できる		
7	卒前・卒後教育②	生涯学習に至る教育体制や内容を理解し、考えを述べることができる		
8	リーダーシップ・マネジメント	管理職としてあるべき姿勢を理解できる		
教科書	検討中	履修条件	8回の講義なので、3回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと	
成績評価	・8回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習				
科目名		教員氏名		単位	配当年次	開講期
地域作業療法学演習Ⅲ		溝部 和 (実務経験教員)		1	2	前期
授業概要		地域作業療法学演習Ⅱで学習した基礎的な内容をふまえ、具体的な臨床技術を演習の中で経験させ、在宅リハにおける作業療法士の臨床活動について論じる				
到達目標		様々な対象者の症状を医学的にとらえ、在宅リハビリテーションにおけるセラピストの活動が理解できるようになる				
授業計画						
1	フィジカルアセスメント 総論①	訪問リハビリテーション場面における危険予測トレーニングを通じてフィジカルアセスメント（PA）の概要を理解することができる				
2	フィジカルアセスメント 総論②	フィジカルイグザミネーション（PE）とフィジカルアセスメント（PA）の違いや問診の重要性、また、これらより得た情報を統合し評価（解釈）することができる				
3	フィジカルアセスメント 総論③	生理学的・病理学的視点から根拠をもって全身状態を判断することの重要性を感じフィジカルアセスメント（PA）の意義を理解することができる				
4	バイタルサイン	バイタルサイン（体温・脈拍・血圧・呼吸）を計測する意義や方法について理解することができる				
5	頭頸部のアセスメント	顔面の視診、甲状腺や頭頸部リンパ節のアセスメントについて理解することができる				
6	呼吸器系のアセスメント	呼吸器系の解剖生理を把握していることを前提に、問診、視診、触診（体表解剖）、聴診、打診することの意義や方法について理解する事ができる				
7	循環系のアセスメント	循環器系の解剖生理を把握した上で問診、視診することの意義や方法について理解するとともに抹消循環器系のアセスメントについて理解することができる				
8	地域の考え方とリスクマネジメント	高齢者が地域で生活を継続する為の視点を学び、それに伴うリスクマネジメントを理解することができる				
9	多職種連携と職域	地域でかかわる多職種を理解することで、セラピストの役割を理解できる				
10	地域の職域と介護保険制度	地域での活動内容から広域な職域を理解し、それに必要な介護保険の基本理念などを理解できる				
11	介護保険制度による住環境整備Ⅰと使用方法	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る。また車椅子やベッドマットの使用方法を理解できる。				
12	介護保険制度による住環境整備Ⅱ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る				
13	介護保険制度による住環境整備Ⅲ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る。また歩行器等の使用方法を理解できる。				
14	介護保険制度による住環境整備Ⅳ	介護保険制度を利用した住環境の整備を学び、ADL、QOLの向上に結びつける事が出来る				
15	在宅に必要な介護技術	実際の場面で必要となる介護方法や家族への指導方法を理解することが出来る				
教科書		フィジカルアセスメントが見える		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書		リハビリテーションリスク管理ハンドブック		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価		・ 15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考						

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習			
科目名	教員氏名		単位	配当年次	開講期
地域作業療法学演習Ⅳ	溝部 和 (実務経験教員)		1	2	後期
授業概要	地域リハビリテーションで必要となる基本的な動作の介助方法と地域介護予防授業で必要なスキルを身に付け論じることが出来る				
到達目標	介護技術を理解し指導が出来るようになる 地域予防事業で必要な知識を身に付け発表することが出来る				
授業計画					
1	車椅子 ①	車椅子操作に関して			
2	車椅子 ②	地域に出て車椅子駆動や車いす生活の問題点を考える			
3	車椅子 ③	地域に出て車椅子駆動や車いす生活の問題点を考える			
4	基本動作 移動 ADL	病院内で運用されているRapid Response System(RRS)のコール基準を理解し、院内業務や在宅リハビリテーションへの応用について学習する			
5	アセスメント ①	基本情報から必要な情報を読み取り理解することが出来る			
6	アセスメント ②	問診、視診、聴診、触診による適切なアセスメントが出来る			
7	アセスメント ③	問診、視診、聴診、触診による適切なアセスメントが出来る			
8	アセスメント ④	OT・PTが必携する打腱器、聴診器、血圧計、パルスオキシメーターなどを使用し、総合的なPEの技術を復習し、PAの臨床的意義を説明できるようになる			
9	アセスメント ⑤	OT・PTが必携する打腱器、聴診器、血圧計、パルスオキシメーターなどを使用し、総合的なPEの技術を復習し、PAの臨床的意義を説明できるようになる			
10	地域介護予防の実践と実践①	地域介護予防事業の実践を学び現状の地域包括ケアを理解する また、グループワークにて課題に対してのプレゼンテーションを実際に作成する			
11	地域介護予防の実践と実践②				
12	地域介護予防の実践と実践③				
13	地域介護予防 プレゼンテーション発表①	課題に対してまとめたものを各グループワーク毎に30分で発表し お互いに学習し理解することができる			
14	地域介護予防 プレゼンテーション発表②				
15	地域介護予防 プレゼンテーション発表③				
教科書	資料配布		履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書			留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・ 15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・ 小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる				
備考					

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☒ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
作業療法学総論Ⅰ	石田裕二・山田竜大・西村大地 (実務経験教員)	1	3	前期
授業概要	臨床実習前の演習として、心構えや知識技術の補完をする			
到達目標	実習の心構えを自覚し、作業療法士としての基礎的な臨床技能を確立する			
授業計画				
1	作業療法総論	既習の知識を統合し、作業療法の目的、対象、評価・治療の概要を確立できる		
2	面接・導入	医師の処方から作業療法導入に至るまでの流れと作業療法士の動きについて理解できる		
3	トップダウンアプローチ ①	いわゆるトップダウンアプローチの考え方、基盤となる理論について、具体的な例から理解できる		
4	トップダウンアプローチ ②	トップダウンアプローチにおける評価から導き出された情報を、作業療法プログラムの立案に応用できるようになる		
5	ボトムアップアプローチ ①	いわゆるボトムアップアプローチの考え方、基盤となる理論について、具体的な例から理解できる		
6	ボトムアップアプローチ ②	ボトムアップアプローチにおける評価から導き出された情報を、作業療法プログラムの立案に応用できるようになる		
7	医学モデルと生活モデル	クライアントの医学的情報と生活環境の情報（職業、趣味、生活パターンなど）をもとに、作業療法プログラムを組み立てることができる		
8	ADLとIADL	具体的な動作分析・活動分析を演習し、臨床現場におけるADLへの考え方を統合できる		
9	高次脳機能障害	既習の高次脳機能障害の評価と治療手技について復習し、臨床能力を高める		
10	身体障害領域の作業療法	身体障害領域の作業療法について総括し、具体的に評価・治療ができる		
11	発達障害領域の作業療法	発達障害領域の作業療法について総括し、具体的に評価・治療ができる		
12	精神障害領域の作業療法	精神障害領域の作業療法について総括し、具体的に評価・治療ができる		
13	老年期障害の作業療法	老年期障害（虚弱、サルコペニア、認知症など）の作業療法について総括し、具体的に評価・治療ができる		
14	総括 ①	診療記録の作成の方法、リハビリテーションカンファレンスへの対応など、実践的な演習の中で作業療法士としてのアイデンティティを高める		
15	総括 ②	既習の学習内容を総括し、各領域の作業療法士の役割について理解を深める		
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	15回の講義なので、4回以上欠席すると定期試験を受験できない	
参考書	検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	・15回の講義のなかで、適宜小テストを実施する ・小テストの結果と定期テストの結果を総合して成績に反映させる			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☒ 講義 ☐ 演習 ☐ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
作業療法学総論Ⅱ	千葉馨・溝部和・佐藤速太 (実務経験教員)	2	3	後期
授業概要	3年間の集大成として学べるよう講義を展開する			
到達目標	治療技術に直接活かせるような基礎・臨床医学の知識，作業療法専門分野の知識を再学習し，臨床能力を高め，その成果を国家試験対策に反映させることができる			
授業計画				
1	基礎・臨床医学領域： 骨格系の構造と機能 ①	骨の発生学，微細構造，形状，骨機能，骨疾患について理解できる		
2	基礎・医学領域 骨格系の構造と機能 ②	関節の形状とその動き，運動器疾患について理解できる		
3	基礎・臨床医学領域 筋の構造と機能 ①	筋の種類，収縮のメカニズム，エネルギー代謝・筋疾患などを理解できる		
4	基礎・臨床医学領域 筋の構造と機能 ②	筋の支配神経，神経筋接合部の機能，関節運動と筋収縮の関係などを理解できる		
5	基礎・臨床医学領域 神経系 ①	中枢神経の構造と機能，中枢神経障害による病態について理解できる		
6	基礎・臨床医学領域 神経系 ②	末梢神経の構造と機能，末梢神経障害による病態について理解できる		
7	基礎・臨床医学領域 神経系 ③	脊髄疾患，脊髄損傷の病態，自律神経の構造と機能について理解できる		
8	基礎・臨床医学領域 内臓系 ① 呼吸循環器	呼吸器・循環器構造と機能，それらの障害を惹起する代表的な疾患について理解できる		
9	基礎・医学領域 内臓系 ② 消化器	消化器に分類される臓器の構造と機能，代表的な疾患について理解できる		
10	基礎医学領域 内臓系 ③ 排泄	腎臓・膀胱の構造と機能，代表的な疾患とその症状について理解できる		
11	基礎・臨床医学領域 内分泌系	内分泌器官の構造と機能，代表的な疾患とその症状について理解できる		
12	基礎・臨床医学領域 先天性疾患	様々な遺伝病，周産期異常など，代表的な先天性疾患の症状について理解できる		
13	基礎・臨床医学領域 精神医学 ①	精神障害領域の疾患と治療について理解できる		
14	基礎・臨床医学領域 精神医学 ②	てんかん，認知症について理解できる		
15	基礎・臨床医学領域 小児科学領域	発達障害も含め小児科領域の疾患について理解できる		
16	基礎・臨床医学領域 臨床心理学	防衛機制，心理療法，各種検査について理解できる		
17	基礎・臨床医学領域 リハビリテーション医学	障害分類（ICF），障害受容，ユニバーサルデザインなどについて理解できる		

18	基礎・臨床医学領域 制度関連	理学療法士・作業療法士法，介護保険などの法制・制度を理解できる		
19	基礎・臨床医学領域 公衆衛生	感染予防，医療制度など，臨床現場に即した知識を習得する		
20	基礎・臨床医学領域 診断学 ①	脳の画像診断学について理解できる		
21	基礎・臨床医学領域 診断学 ②	胸部，腹部，四肢の画像診断学について理解できる		
22	基礎・臨床医学領域 診断学 ③	異常心電図の判読，心疾患の診断について理解する		
23	基礎・臨床医学領域 臨床薬理学	様々な症状に適応する薬剤について理解できる		
24	基礎・臨床医学領域 生化学検査	生化学的検査による正常基準と異常所見を惹起する疾患について理解できる		
25	基礎・臨床医学領域 PE・PA	フィジカルアセスメントに関連する各事項について理解できる		
26	専門領域 ①	身体障害領域の作業療法について，その目的と方法を理解できる		
27	専門領域 ②	精神障害領域の作業療法について，その目的と方法を理解できる		
28	専門領域 ③	発達障害領域の作業療法について，その目的と方法を理解できる		
29	専門領域	老年期障害領域の作業療法について，その目的と方法を理解できる		
30	まとめ	作業療法の源流となる各種の理論について，理解を深める		
教科書		既存の教科書を適宜使用する	履修条件	30回の講義なので，7回以上欠席すると定期試験を受験できない
参考書		検討中	留意事項等	できるだけ欠席せず，予習復習を怠らないこと
成績評価		・30回の講義の中で数回小テストを行い，模擬試験の結果も勘案したうえで，各々の成績の合算により総合的に判定する		
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☐ 演習 ☒ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅰ	千葉 馨 (実務経験教員)	1	1	後期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における作業療法士の臨床活動を見学する			
到達目標	実習施設における職員の連携の様子を見学し、また、実際に患者や利用者に関わる中で、障害像や作業療法士の職務について理解を深めることができる			
授業計画				
1	1単位（40時間）で行う臨床実習Ⅰ（見学実習）を通して、作業療法士の職務について理解を深める。臨床場面における作業療法士の活動、他のリハビリテーション関連職種との連携業務を見学し、リハビリテーション業務の全体像を理解する。また、臨床教育者の指導により、患者（利用者）と個別にコミュニケーションをとり、大まかな障害像を把握できるように学習する。 本実習では、それぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 臨床実習前の評価（8時間）により、どのような態度・視点で見学実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、臨床教育者とのコミュニケーションのとりかた、当該実習施設の役割や使命、リハビリテーション部門の大まかな業務の流れ（処方・評価・治療など）、作業療法士の具体的な業務、などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。 臨床実習後の評価（8時間）では、臨床実習Ⅰで学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☐ 演習 ☒ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅱ	千葉 馨 (実務経験教員)	1	2	前期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、訪問リハビリテーション及び通所リハビリテーションにおける作業療法士の臨床活動を見学する			
到達目標	実習施設における職員の連携の様子を見学し、また、実際に患者や利用者に関わる中で、障害像や作業療法士の職務について理解を深めることができる			
授業計画				
1	1単位（40時間）で行う臨床実習Ⅱ（地域在宅見学実習）を通して、作業療法士の職務について理解を深める。在宅場面における作業療法士の活動、他のリハビリテーション関連職種との連携業務を見学し、リハビリテーション業務の全体像を理解する。また、臨床教育者の指導により、患者（利用者）と個別にコミュニケーションをとり、大まかな障害像を把握できるように学習する。 本実習では、それぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 臨床実習前の評価（8時間）により、どのような態度・視点で見学実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、臨床教育者とのコミュニケーションのとりかた、当該実習施設の役割や使命、リハビリテーション部門の大まかな業務の流れ（処方・評価・治療など）、作業療法士の具体的な業務、などを事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。臨床実習後の評価（8時間）では、臨床実習Ⅰで学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。 指定規則に則り、通所リハビリテーション又は訪問リハビリテーションに関する実習を1単位（40時間）以上行うこととする			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☐ 演習 ☒ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅲ	千葉 馨 (実務経験教員)	3	2	後期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における作業療法士の指導の下、見学・模倣の中で各種検査法の実習を行う			
到達目標	病院・施設における作業療法士の具体的な臨床活動、特に様々な障害に対応する各種の検査法について理解を深める			
授業計画				
1	3単位（120時間）で行う臨床実習Ⅲ（検査実習）を通して、作業療法士が対象者の検査をどのように実施しているかを見学・模倣を通して理解を深める。臨床指導者の指導により、各障害に対応する適切な検査法を選択し、患者（利用者）にそれを正確な手技で実施できるようになる。 本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身に着けて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査方法、その検査結果が示す健常者との相違点など、作業療法士が行っている検査法を事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。 臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する	履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない	
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること	留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと	
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☐ 演習 ☒ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅲ	千葉 馨 (実務経験教員)	9	3	前期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における作業療法士の指導の下、見学・模倣の中で各種検査法の実習を行う			
到達目標	病院・施設における作業療法士の具体的な臨床活動、特に様々な障害に対応する各種の検査法について理解を深める			
授業計画				
1	9 単位（360時間）で行う臨床実習Ⅳ（総合実習）を通して、作業療法士が対象者の検査をどのように実施しているかを見学・模倣を通して理解を深める。臨床指導者の指導により、各障害に対応する適切な検査法を選択し、患者（利用者）にそれを正確な手技で実施できるようになる。評価結果を統合し、治療計画を立てることができる。 本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 7 臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身に付けて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査方法、その検査結果が示す健常者との相違点など、作業療法士が行っている検査法を事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。 9 臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する		履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				

☐ 選択 ☒ 必修		☐ 講義 ☐ 演習 ☒ 実習		
科目名	教員氏名	単位	配当年次	開講期
臨床実習Ⅳ	千葉 馨 (実務経験教員)	9	3	前期
授業概要	臨床教育者のクリニカルクラークシップの要領による指導により、病院・施設における作業療法士の指導の下、見学・模倣・実施のプログラムの中で治療学実習を行う			
到達目標	病院・施設における作業療法士の具体的な一連の臨床活動（治療的介入）を見学・模倣・実施を通じて体験し、理解することができる			
授業計画				
1	9 単位（360時間）で行う臨床実習Ⅳ（総合実習）を通して、作業療法士が対象者の検査をどのように実施しているかを見学・模倣を通して理解を深める。臨床指導者の指導により、各障害に対応する適切な検査法を学びそれを正確な手技で実施できるようになる。この情報をもとに治療計画を立てて治療プログラムを考えることができる。 本実習ではそれぞれ臨床実習前の評価及び臨床実習後の評価を行う。 7 臨床実習前の評価（24時間）により、どのような技能を身に付けて実習に臨めば目標を達成できるのかを学ぶ。患者（利用者）との接し方、疾患・障害を理解するための情報収集の方法、対象者に応じた具体的な検査方法、その検査結果が示す健常者との相違点など、作業療法士が行っている検査法を事前に学習し、自分で本実習の目標を立てることができるようになる。 9 臨床実習後の評価（16時間）では、本実習で学び得たことを発表し、他の学生からの質疑を通して到達目標を達成できたかを確認する。			
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
教科書	既存の教科書を適宜使用する		履修条件	全日程の1/5以上欠席すると単位を認定しない
参考書	既存の教科書、ノート、ジャーナルなどの参考資料を有効に利用すること		留意事項等	できるだけ欠席せず、予習復習を怠らないこと
成績評価	臨床実習前の評価、臨床実習後の評価、実習記録、課題等の成果物などを総合的に判断し評価する			
備考				